http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.166　13/03/07

そっと広げる手

前号の続き。梯久美子さんの文より。

＊

仕事部屋の壁に、ある写真家の作品をかけてある。縦約一メートル、横約八〇センチの大きな写真だ。写っているのは、細長く裂けた二枚の布地。色は褪せたピンクで、プラスティックの赤いボタンが縫いつけられている。薔薇の花のかたちをした飾りボタンだ。一列に並んだこのボタンがあることで、破れ、ほつれたこの布地が、ブラウスの前立ての部分であることがわかる。昭和二〇年八月六日の朝、広島の少女が着ていたブラウスだ。

生地がほぼまっすぐに裂けていることや、プラスティックのボタンが溶けずに無傷であることから、爆風でちぎれたのではなく、治療の際、脱がせようとして鋏を入れたのではないかと思われる。少女は亡くなったが、ブラウスが残った。

このブラウスの写真が撮られたとき、私はその場にいた。二〇一〇年一月、広島平和記念資料館でのことだ。撮影者は石内都氏。

（中略）

撮影の朝、学芸員の若い女性が、地下の収蔵庫から遺品たちを運んできた。どれも薄紙に丁寧に包まれている。最初に明けられた包みの中に入っていたのが、冒頭の薔薇のボタンのブラウスだった。

くしゃくしゃになったピンクの布の塊が、撮影用に敷かれた白い紙の上に置かれたとき、それがいったい何なのかわからなかった。白い手袋をした学芸員の手が、慎重に皺を広げていくと、あざやかな赤いボタンが現れ、そのとき初めて、これがブラウスだとわかったのだった。

薔薇のボタンは、現代の女の子が着る洋服についていても少しもおかしくないお洒落なものだった。その場にいたのは、石内氏とアシスタント、学芸員、編集者、地元のテレビ局のディレクターと、たまたま全員が女性だった。原爆の悲惨さの象徴のようなぼろぼろの布の塊を、息をつめて見ていた女たちは、薔薇のボタンが現れたとたん、ほっとしたように話始めた。

「見て、こんなに鮮やかな赤」

「可愛いね」

「私もこんな飾りボタンの服、持ってた。小さい頃に」

「あ、私も」

色あせて固く縮こまった布の塊は、戦争を知らない世代が抱く戦争のイメージに似ていた。理解できない、怖ろしいもの。簡単に触れたり語ったりしてはいけないもの。あまりに遠くて、共感の余地のないもの―。

けれども、思いがけず赤いボタンが見えたとき、その場にいた誰もが、突然回路がつながったように、理解し、共感し、何かを語りたくなった。たった数個のボタンによって、これを着ていた女性を身近に感じ、その時代の気配を感じることができたのである。

私は自分の仕事が、白い手袋をはめた学芸員の手のようにあればいいと思う。固く縮こまった布をそっと広げ、隠れていた薔薇のボタンをあらわにした、あの手。

（「薔薇のボタン」、『學士會会報』2012-Vより）